シンポジウム

社　会　哲　学　の　現　在

趣意書

グローバル経済の展開と、それに伴う格差社会の進行や福祉国家の弱体化をうけて、近年、社会的なものについての議論が活発になっている。しかしこと哲学・思想分野にかぎってみれば、むしろそこには社会哲学の危機が横たわっているようにもみえる。ひどく大雑把にいってしまえば、現代哲学の理論的部分は科学哲学や分析哲学に、実践的部分は応用倫理学と公共哲学に分化・収斂しつつあり、社会的なものを哲学的に扱う学問は、忘却されつつあるように思われるからである。

たしかに、社会哲学の領域は人文社会科学の様々な専門分野の重なり合う領域であり（というのも、あらゆるものが何らかのかたちで社会的な刻印を帯びているからだ）、それゆえ、学問の専門化・細分化の過程のなかで、社会哲学という＜ひとつの＞学問が成立する余地はもはや存在しないようにもみえる。しかしながら、現代社会の政治・経済構造についての包括的な反省や、ありうべき自由や連帯の構想のためには、どの専門分野にも当てはまらない独特の思想様式が求められているように思われる。社会的なもののロジックは、いわゆる論理学的なものではない。たとえば、フォン・ウリクトが気づいていたように（『説明と理解』）、あるものａの否定の否定が同じａには戻らないヘーゲルの論理学は、現実的なものの変遷を前提してのみ理解可能で意義のあるものとなる。言いかえればそれは、現実の論理を摘出しうる可能性を秘めている。また、社会的なコンフリクトは、倫理的な善悪や、公正・不正といったカテゴリーで分析し尽くせるものではない。ましてや、それらによって解決することは望むべくもないであろう。社会的なものを分析・問題化・解決する道は、フランクフルト学派が提起した承認論やマルクス主義の展開するアソシエーション論によってよりよく提示されている。

さしあたり本学会にかぎっていえば、社会哲学を自認・自称していなくとも、社会哲学的な研究を進めている会員が多いのではないだろうか。それを言いかえれば、個別の専門分野を探究しつつも、それを超えたより普遍的な問題に取り組んでいる研究者が多いということである。そしてもしもそうであれば、社会哲学の理念を緩やかなかたちで共有することで、会員相互の理解が得られ、よりいっそう充実した研究活動に繋がっていくのではないだろうか。そこで、社会哲学の理念を再確認し、より発展させるために、「社会哲学の現在」というテーマでシンポジウムを企画した。「社会哲学の現在」と銘打ったが、必ずしも最新の研究成果の紹介を意図したものではない。現在、社会哲学を自認し、成果を上げているのは何といってもフランクフルト学派であろう。しかし、フランクフルト学派がイコール社会哲学というわけではない。とくにフランスでは、社会哲学という専門分野そのものが存在していないのだが、社会的なものに関する哲学的・理論的考察というものは、もちろん存在するはずである。そのあたりの事情も含め、社会哲学の今日的理念は何であり、いま日本の社会的・学問的状況のなかで、社会哲学はどうあるべきなのかを議論すること、これが本シンポジウムの趣旨である。